岩手県で、独居高齢者を見守る仕組み「まごころ宅急便」が出来上がった！

コニコ待っているのに、その日は奥から『そこに置いてって』と。帰り際も縁側から手を振るいつもの姿が見えない。おかしいな。でも上がるわけにもいかず、『またね』と声をかけるしかなかった。亡くなったのは多分、その晩で、最後に話をしたのは私だったかもしれません」

もし、どこかに連絡すれば、孤独死は防げ、三日も経過することはなかったのでは。自らを責め続けた。判子をもらうだけがSDの仕事ではない。自分たちにできることはないか。夢の中でも思い詰めたのか、半年後、朝四時ごろ目が覚めるとアイデアがひらめき、夢中で書き留めた。それが企画書となった。が、上司からはなかなか承諾を得られない。思いあぐね、新聞で知った福祉専攻の大学教授に手紙を出した。何カ月かして返事が来た。「試験的にやってみましょう」。

○九月三月、実証実験開始。県の社会福祉協議会（以下、社協）が毎日、一人暮らしの高齢者宛てにメール便でお知らせを出す。手渡しするSDが体調確認を行い、報告をあげる。細かな情報収集が好評だったが、一カ月で終了。「二度目の長いトンネル」（松本）に入る。

一年後、社協関係者の東京での発表会に参加した際の出会いが事態を打開する。「うちの町を何とかしてほしい」。西和賀町社協事務局長の高橋純一だった。一週間後には町の食堂の二階に寝泊まりし、調査に明け暮れる松本の姿があった。

高齢化率四三％は県内一位。八〇％近い地区も。共同浴場に一緒に入り話を聞いた。みんな買い物に苦労していた。週一回、移動販売車が来る地点まで往復一二キロ歩くお年寄りもいた。「弁当一つでもワンコインで届けられますか」。高橋の要請を受け、一〇年九月、社協と連携したまごころ宅急便がスタートする。

登録した一人暮らしの高齢者から社協に依頼が入ると、職員が町のスーパーで買い物を代行し、SDが届ける際、「見守りシート」に確認項目を記入、社協にFAXする。料金は通常より低め。集荷と配送を同じSDが同一地域で行うため何とか収支が合い、「赤字にならなければいい」と判断した。

一人暮らしの高齢者が「ご用聞きボタン」（写真左下）を押すと、コールセンターが注文を受け、買い物などを代行してSDが届ける（最上）。SDは届ける際、高齢者の体調などの項目を確認して「見守りシート」に記入し（上）、社協にFAXする。西和賀町社会福祉協議会事務局長・高橋純一氏と、まごころ宅急便の生みの親・松本まゆみ氏。